

英国のカントリーハウス庭園とポライト・ツーリスト--19世紀後半から20世紀のニューステッド・アビーを中心に

著者	橘 セツ
雑誌名	神戸山手大学紀要
号	12
ページ	71-89
発行年	2010-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000697/

英国のカントリーハウス庭園とポライト・ツーリスト —— 19世紀後半から20世紀のニューステッド・アビーを中心に ——

English Country House garden and polite tourist: landscape improvement of Newstead Abbey, Nottinghamshire in the late 19th and 20th century

橘 セ ツ

キーワード: 1. イングランド、2. カントリーハウス庭園、3. ポライト・ツーリスト、
4. ニューステッド・アビー (ノッティンガム州)

Keywords: 1. England, 2. Country House garden, 3. polite tourist, 4. Newstead Abbey
(Nottinghamshire)

要 約

Polite は18世紀に貴族とジェントリによる上流階級で新たに共有された社会的な行動規範のひとつである。本稿では、英国中東部ノッティンガム州にあるカントリーハウスであるニューステッド・アビー Newstead Abbey 庭園の改良を事例に、カントリーハウスにおける polite な庭園管理の実践について考察する。

I. はじめに

1) カントリーハウスとポライト・ツーリスト

英国の貴族などの大地主は、16世紀末頃から20世紀初期にかけて、一族の出自のある地方の広大な地所 Estate に大邸宅を建てた。この地主の地方の大邸宅のことをカントリーハウスとよび、地主は邸宅と庭園に富をつぎ込んで趣向をこらした。カントリーハウスの空間で、いかに壮麗な建築スタイルと庭園管理において趣味の良さを示すかが、所有者の権力の現れであった。建築文化史学者 Mark Girouard は、英国のカントリーハウスの生活についての著書のなかで、カントリーハウスの社会的機能について、権力、社交、科学技術、モラルなどの多様な視点から論じている。(Girouard, 1978)

カントリーハウスは、所有者のプライベートな住まいであると同時に、パブリックな社会性をもつ場所として機能した。カントリーハウス所有者は、地主であり、その地方の支配者であっ

た。広大な地所と邸宅を管理運営するためにカントリーハウスの所有者は多くの人々を雇用した。大きなカントリーハウスの周辺には、カントリーハウスで雇用されている人々と家族が暮らす村 Estate village ができた。雇い人の立場にたつと、カントリーハウスは、労働の場所であった。(ホーン, 2005; Culpin, 1995)

カントリーハウスは、地主階級の社交の舞台であった。かれらは、冬期の国会のある時期は、ロンドンにあるタウンハウスで政治と社交のシーズンを過ごし、夏期には、それぞれの地所にあるカントリーハウスに戻った。カントリーハウス所有者の上流階級はお互いの地所に招きあい、もてなしあった。かれらは、狩猟などのスポーツをカントリーハウスのある地所で行った。カントリーハウスをもてなしの場所として魅力的に保つということが、地主として地所を運営する上で重要であった。カントリーハウスは、社交のための接客空間であった。カントリーハウスは限られた機会であったが外部から一般の見学者も受け入れてきた。カントリーハウスがどのように外部の人々に見学されたかという歴史について、文化史学者の Adrian Tinniswood は、*The Polite Tourist* というタイトルの書を著している。楽しみのために旅行をする人々である tourist という語の誕生は、19世紀半ばまで待たれるが、カントリーハウスを楽しみのために見学する人々の歴史はこれより古い。カントリーハウスは、polite なツーリストに対して、polite な場所であるカントリーハウスを三百年以上にわたって公開してきた歴史をもつ。(Tinniswood, 1998)

18世紀のカントリーハウス隆盛時代の英国の上流社会と文化をめぐる研究では、この polite という語がキーワードとなっている。polite には、「1. 丁寧な、礼儀正しい、2. 洗練された、高尚な、3. 上品な、教養のある; 上流の」(『ジーニアス英和大辞典』による)などの一般的な意味があるが、18世紀以降、polite は上流社会のメンバーがとるべき行動規範のひとつとしてみなされるようになった。カントリーハウスの空間では上流社会の人びとは polite という価値基準によって互いに判断し、polite な言動が求められた。カントリーハウスは、ホストにとってもゲストにとっても polite が実践される場所であった。

歴史学者の Tom Williamson は、*Polite Landscapes* というタイトルの著書のなかで、18世紀のイングランドの庭園と社会を polite という視点から読み解いた。従来は、およそ二百家程度の世襲貴族階級とジェントリとよばれた平民である地主との間には身分の違いがはっきりしていた。それに対して18世紀は、社会が流動的であり変動のある時代であった。18世紀は、ジェントリが、企業家精神を持ち新大陸との奴隷貿易を含む貿易や産業革命による工業化によって得た利潤で莫大な富を蓄積した。このように富と力を新たに得た階層が、世襲貴族によって構成されていた上流社会に上昇した。本来、上流社会は限られた世襲貴族のメンバーによる社会的なつきあいに閉じられていて、かれらの間のつきあいにかかわるエチケットは厳格であった。しかしながら、新興勢力が社会的に上昇したことで、従来の上流社会は、異質な価値観を持つ新興勢力を受け入れ、かれらと社会的につきあう必要が生まれた。新興勢力は財力にまかせて

新たに広大な地所を購入し、贅を尽くした貴族のようなカントリーハウスを建てた。新たに、上昇した新興勢力は、経済的な消費力を背景に貴族のライフスタイルを模倣した。(川北, 1996) 今までは、貴族とジェントリは身分が異なった集団であるが、しだいにひとつの上流階級を形成しつつあった。この過程で、新たに共有された社会的な行動規範のひとつが *polite* であった。だから *polite* という基準は、上流社会のライフスタイルをめぐるありとあらゆる局面で重要であった。逆にいえば *polite* という基準をみたすような着衣や身体の立ち居振る舞いから、カントリーハウスと庭園の景観管理をめぐる物質的なライフスタイルまで自らの経済力で実現していると認められれば、生まれながらの貴族でなくても、上流社会に上昇できた。(Williamson, 1995)

Williamson によると *polite* という価値観は、消費の力である程度実現できると定義されている。財力さえあれば、社会的に上昇できるという時代において、とくに新興勢力の間ではいかに財力があるのかということをひけらかすような消費 *conspicuous consumption* が、カントリーハウスと庭園と地所とその社交に注がれた。しかしながら派手すぎる消費によって実現されたカントリーハウスにおいて、趣味と品格および支配者として地所に住む人々に対する慈愛の心がどのように実現されているのかという哲学とモラルも問われた。(ダニエルズ, 2001) このような施主の考えをカントリーハウスの地所と庭園のデザインを改良することで実現する *landscape gardener* という専門職も生まれた。このような時流の中で広大な地所を見渡すように地形を生かして川の流れや湖を配置する自然風の風景を創りだすようにデザインされた風景式庭園という新しい庭園様式が英国で生まれた。なかでも、ウィリアム・ケント William Kent、ランスロット・ブラウン Lancelot Brown、ハンフリー・レプトン Humphry Repton などが提案する風景式庭園のデザインがカントリーハウス所有者の施主のあいだで人気があった。(Daniels, 1999 ; 2002)

一方、新興勢力の経済的な活躍の場所は、英国内にとどまらなかった。新たにカントリーハウスの所有者となった新興勢力の富の多くは、西インド諸島にある黒人奴隷労働によって支えられたプランテーションや新世界や植民地との貿易の利潤によっていた。18世紀の上流階級の世界を描いたジェーン・オースティンの小説『マンスフィールド・パーク』では、マンスフィールド・パークの地主サー・トマス・バートラムは西インド諸島のアンティグア諸島に砂糖プランテーションの地所を所有していた。バートラムは、小説の中で、アンティグア諸島と英国の間を行き来する。マンスフィールド・パークにおける物質的に贅沢なライフスタイルは、アンティグア諸島の砂糖プランテーションからあがる富によって支えられていた。英国は帝国を地球的規模に、西南アフリカ、インド、カナダ、オーストラリア、西インド諸島にまでのばしつつあった。カントリーハウスの生活は、大英帝国の富の集積として成り立っていた。文化批評家のエドワード・サイードはこの点を小説の中の仕事と事業と階級に関するモラルの展開において鋭く指摘している。(サイード, 1998)

英国人の地主がカントリーハウスで贅沢な生活ができたのは、黒人奴隷労働による西インド諸島のプランテーションからもたらされた莫大な富によっていたことについて具体的に精査する研究が近年進んでいる。2007年は大西洋奴隷貿易が英国議会による法令で禁止された1807年から数えて二百周年であった。それを記念して、英国で多くのカントリーハウスを現在所有する団体イングリッシュ・ヘリテージ English Heritage とナショナル・トラスト National Trust では奴隷制と英国内のカントリーハウスのつながりについて考察する展示やイベントが開催された。中でも2009年ロンドン大学でひらかれた奴隷制と英国のカントリーハウスについての研究会 *Slavery and the British Country House: Mapping Current Research* はひとつの集大成となった。

地理学者の Susanne Seymour らは、英国と西インド諸島の両方に地所を所有する地主の地所管理についてピクチャレスクという視点から分析している。(Seymour et al., 1998) ピクチャレスクとは18世紀の英国で、生み出された新しい美の規範である。18世紀には、貴族の子弟の間で、グランドツアーと呼ばれるイタリア旅行が流行した。(本城, 1995; 岡田, 2010; Wilton, 1996) かれらがグランドツアーの目的地ローマで夢中になってみたものは多くの古代遺跡の廃墟であった。かれらは廃墟のある風景に美しさを発見した。貴族の子弟は、グランドツアーでみたイタリアの風景を描いた風景画を買い求め、カントリーハウスの壁面に飾った。英国人の間ではとくにクロード・ロランの描いた風景画に人気が集まった。クロード・ロランが得意としたのは「中景に暗い樹木が茂り、遠景に明るいカンパーニヤの眺望が開けるといった種類の、比較のおだやかな風景」(川崎, 1991) である。ピクチャレスクとは、クロード・ロランの絵画に見られるようなある特定の絵画美であった。ユヴェデイル・プライス Uvedale Price のピクチャレスクの定義は「荒々しさ、複雑さ、不規則性を特色とする小規模な風景で、鋭い対照と多様な色合いに満ちたもの」である。かれらは、古代遺跡のような廃墟を描いた絵画を室内に飾ることにとどまらず、廃墟のような装飾的建造物をカントリーハウスの庭園に新たに建築した。あるいは、すでに英国内に多く存在していた廃墟を愛でるためのピクチャレスクツアーに出かけた。ピクチャレスク愛好家たちは、英国西部ワイ川流域にある修道院の廃墟ティンターン・アビーを好んで訪れた。ティンターン・アビーは、ピクチャレスク愛好家たちに多く描かれ、詩に詠われた。一方18世紀後半の英国をめぐる社会世相を考えると、対岸ではフランス革命がおこり、英仏戦争が勃発した。18世紀は社会不安の時代でもあった。この時代と廃墟のような「不規則で荒れた感じ」や「心たのしい恐怖感」を誘うピクチャレスク趣味は同調した面があった。(川崎, 1991; 高山, 1995; 2007) カントリーハウスの庭園の景観管理の側面でも、邸宅を広大な地所の中でこれみよがしに誇るようなランスロット・ブラウンの提案するような風景式庭園に対して、邸宅をクロード・ロランの描く風景画にあるような暗い樹木林の中に隠して、遠望できないようにするピクチャレスクな景観管理もユヴェデイル・プライスやリチャード・ペイン・ナイト Richard Payne Knight らから提案された。当時のカント

リーハウス所有者の知識人の間ではどのような景観管理が品位やモラルの観点からよいのか多様に議論された。(ダニエルズ, 2001; Seymour et al., 1998)

Polite というのは、社会変動の時代にあらたに創造された価値基準である。Polite とは、具体的にどのようなスタイルであるかということは常に社会の移り変わりとともに変化するものであり、上流社会で polite という価値観の実践に関して議論された。カントリーハウスは、所有者にも訪問者にも polite という点に関して実践が問われているという意味で政治的な空間である。カントリーハウスは、力関係があらわになる空間であるとともに、polite を実現するプロセスのなかで地主の趣味や品位、モラルが問われる空間であった。(Williamson, 1995)

2) 本稿の視点：ニューステッド・アビーの庭園とポライトな改良

本稿では、英国の中東部ノッティンガム州にあるカントリーハウスのニューステッド・アビー Newstead Abbey 庭園の改良を事例に、カントリーハウスにおける polite な庭園管理の実践について考察する。ヘンリー 8 世が行った修道院の解散法 (1539) によって、ニューステッドの地所にもともとあったオーガスティン派の修道院は解散した。解散させられた修道院の地所が 1540 年に貴族のバイロン家 the Byrons に下賜された。以来三百年近くにわたってバイロン家がニューステッド・アビー地所を所有した。しかし 6 代の詩人バイロン卿 (ジョージ・ゴードン・バイロン) が経済的にニューステッド・アビーを維持することが困難になり 1817 年に売却した。その後ニューステッド・アビーの所有者は 19 世紀を通じて次々と移り変わっている。ニューステッド・アビーの所有は、まず、西インド諸島 (ジャマイカ) にプランテーションを所有するワイルドマン家 the Wildmans (1818-1860)、次に炭鉱主一族のウェブ家 the Webbs (1861-1931) に移っている。最後に地元の富裕な企業家で慈善家カーン卿 Sir Julien Cahn が 1931 年に購入して直ちにノッティンガム市へ寄贈した。現在もニューステッド・アビーはノッティンガム市が所有し邸宅と庭園を博物館として市民に公開している。ニューステッド・アビーは、現在も見学することのできる特色あるカントリーハウスであり、ノッティンガム市の観光資源である。ニューステッド・アビーの地所は、現在、Site of Importance for Nature Conservation (SINC) に指定され多様な動植物が生息する自然保全地区となっている。

本稿では、ニューステッド・アビーの所有者が 19 世紀の初期以来、世襲貴族→ジャマイカにプランテーションを所有する軍人→炭鉱所有者と、その時代の新興勢力に移り変わったことで、どのように庭園に改良が加えられ、polite が実践されたのか多様性をみる。新たに財力を築いて成功の証としてニューステッド・アビーを所有した新興勢力の地主の活動範囲は英国内にとどまらない。ワイルドマン家の富は、ジャマイカの砂糖プランテーションから得ていた。炭鉱経営で成功したウィリアム・フレドリック・ウェブは、ニューステッド・アビーには多くの時間とどまらず、アフリカ探検で活躍した。このようにニューステッド・アビーの庭園を含む景観管理の実践の中に、英国以外の多様な世界の国々との関係をみることも本稿の目的である。

一方で6代バイロン卿がニューステッド・アビーを1817年に売却した後も、ニューステッド・アビーは伝説的なバイロン家、とくに6代詩人ジョージ・ゴードン・バイロンの家であったことは現在まで語られている。バイロン家の後の所有者は、ニューステッド・アビーが公開されるときには、詩人バイロンにかかわる言い伝えや伝来の事物を展示して、詩人バイロンに敬意をあらわしている。ニューステッド・アビーについてヴィクトリア時代に執筆された初期のガイドブックでも現代のガイドブックでも、詩人バイロンのことは必ず語られている。バイロンは、このニューステッド・アビーのもつキャラクターの一部になっている。次のⅡ章では、地所所有者の視点からみたニューステッド・アビー庭園の改良について *polite* の実践の視点からみる。続くⅢ章では、ポライト・ツーリストの視点からニューステッド・アビー庭園をみる。

Ⅱ．地所所有者の視点からみたポライトなニューステッド・アビー庭園の改良

「(ロンドンの都市構造を考えるうえで興味深いのは、) サイオン・ハウスに見られるように、土地が最初は修道院として開発され、やがて後に貴族に下賜されてゆく例が多いということである。」(鈴木, 1996: 15) と建築史学者の鈴木博之が指摘するように、英国の多くのカントリーハウスのルーツは修道院にある。本稿で事例とするカントリーハウスのニューステッド・アビーのアビーは大修道院あるいは大聖堂という意味である。もともとこの地は、1163年頃にオーガスティン派の修道院 *a priory for Augustinian Canons* として開発された。しかしヘンリー8世による修道院解散法(1539)によってこの地に建てられたオーガスティン派の修道院が解散された。その後ヘンリー8世は *Sir John Byron of Colwick* にその修道院の地所を下賜した。バイロン卿は、下賜された *Newstead* の地所を、修道院 *priory* の地であったことにちなんで、*Newstead Abbey* と名付け直した。(Jones and Riley, 1995) 修道院の規模のランクでいえば、*priory* は *abbey* より規模の小さな修道院である。しかしながら、バイロン卿は、新たに得た地所に誇らしく *Abbey* の名前を適用して自らの邸宅を昇格させた。そのようにニューステッド・アビーの名前自体がバイロン卿によって新たに命名された。図1の写真をみればわかるように、現在のニューステッド・アビーも修道院のおもかげを残した建築物である。ニューステッド・アビーは修道院の廃墟を利用したピクチャレスクなカントリーハウスとして後の所有者たちは改良しながら居住した。ニューステッド・アビーには、300エーカーあまりの地所 (*park land*) がある。

この写真の左側に三角形のかたちが見える部分はオーガスティン派の聖マリア修道院 *the Priory of St Mary* の礼拝堂であった。現在、その部分の礼拝堂は廃墟となり13世紀後期につくられた西側の壁 *West façade* のみが残っている。ニューステッド・アビーの邸宅となる主建築物はバイロン卿によって再命名されたように後の居住者たちによっても *the Abbey* とよばれている。邸宅は口の字型の回廊のある建物で南西の角に塔がある。さらにそこから館が西に伸びているという空間構成になっている。邸宅の東側は、いくつかの区画に分かれた整形式庭園

が広がっている。邸宅からみて北西から南東にかけて地所の中をリーン川 River Leen が流れている。このリーン川をめぐって景観は時代によって大きく変化する。バイロンの時代は水車小屋がある風景が展開し、さらに川はせき止められ滝と湖がつくられた。ワイルドマンの時代にはもっとおおがかりに整備され、大きな装飾的な湖 the Garden Lake が造成された。



図1 ニューステッド・アビーを西側から望む

(出典：2008年3月筆者撮影)

この章では、バイロン家の時代（1540－1817）、ワイルドマン家の時代（1818－1860）、ウェブ家の時代（1861－1931）のニューステッド・アビーの庭園の改良について概観し、polite な庭園の改良の実践について考察する。

1) バイロン家の時代（1540－1817）

バイロン家の時代の湖・池・川など水に関わる景観の改良についてまず概観する。邸宅からみて北西から南東に向かってリーン川 River Leen が流れている。バイロンの時代にリーン川をせきとめて堰と滝をつくった。バイロンの頃には Upper Lake は Mill lake とよばれ、水車小屋があり水車が動いていた。邸宅の東南には Stew Pond とよばれる魚の池がある。修道院では、金曜日に魚を食べるという慣習があり、Stew Pond では、もともとは修道士が食べる魚を育てていた。18世紀初期のバイロンの時代に Stew pond は南北に長方形のかたち整備され装飾的な運河のような池をかたちづくった。池の両側は、イチイの小道 yew tree walks があり、後のヴィクトリア時代には鯉を飼っていた。池の北の端には、聖マリアの井戸 St Mary's Well があった。この井戸は、願いがかなう井戸 Wishing Well と信じられていた。井戸は20世紀半ばまで使われていた。井戸の水は冷たくて、魔法の力 magical powers があると信じられていた。

バイロンの時代に、邸宅の北東にある大きな庭園 the Great Garden は、Devil's Wood と長方形の装飾的池 Eagle Pond からなる。これらはオランダ式のスタイルで、そのスタイルが流行した17世紀後半から18世紀頃につくられたと考えられる。装飾的池 Eagle Pond はクルミの木立によって囲まれていて、鏡池 Mirror Pond とよばれた。中世の修道院時代は魚を飼う池として使われていたと考えられる。大きさは、300フィート×100フィートの長方形である。北

側の壁は、14世紀に起源をもつと考えられる。壁の北に小道をたどると森の池 Forest Pond にいきつく。バイロン家の人々は、この池をアメリカ湖 American Lake とよんでいた。Devil's Wood があつた庭園は、バイロン家の時代は、冬は室内に持ち運ぶような植木鉢に植えたオレングジの木が飾られていたと考えられる。バイロン家の時代に、follies とよばれる彫像を庭園に装飾的に配置した。

詩人で有名なジョージ・ゴードン・バイロン（1788－1824）は、1797年彼がわずか9歳のときに6代バイロン卿の爵位を継ぎ、ニューステッド・アビーの地主となった。その後バイロンは、名門パブリックスクールのハロー校に進み、つづいて1805年ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジに入学する。はじめはニューステッド・アビーの邸宅は借家人に貸していたが、1808年にバイロン自身が居住しはじめた。邸内は荒れ放題であつたが、彼は大改造を試みた。バイロンはニューステッド・アビーのホストとしてケンブリッジ大学の学友たちを招いてパーティをしてもてなした。ニューステッド・アビーは友人をもてなす接客空間として機能した。彼は、生まれつき右足が不自由であつたがスポーツが得意だった。バイロンは、邸内の大ホール the Great Hall をピストルの射撃の練習場にし、大ダイニング the Great Dining-Room (Salon) をボクシングやフェンシングの練習場にした。邸宅でのバイロンの放蕩生活も規模が大きくなった。邸宅を整備するためのお金は潤沢ではなかった。

バイロンは放蕩をし尽くし、財政難であつた。バイロンの奇行はとどまらない。彼は修道院時代にあると伝えられた埋蔵金を掘り出そうとして邸宅の北側の庭園地を発掘するほどであつた。結局バイロンは埋蔵金を発見できなかったが、彼の庭師はオーガスティン派の修道士の頭骨を発掘した。バイロンは、これをノッティンガムの金細工師に持ち込み、酒杯として加工を頼んだ。この髑髏の酒杯は友人たちとの宴で使用された。これは趣向をこらしたアトラクションでありもてなしとなった。(Wood, 1978 ; Coope, 1987)

彼は、熊、多くの犬、亀、ハリネズミなどの多くの動物を邸内で飼っていた。彼は愛犬であるニューファンドランド犬の Boatswain を1808年11月に亡くした。彼は、死を悼んで1808年から1809年にかけての冬 Boatswain の大きな記念碑を邸宅の東側の庭園に建立した。

バイロンは1809年ポルトガル、スペイン、ジブラルタル、マルタ島、アルバニア、ギリシャ、小アジアなどへ向かってグランドツアーに従者と友人たちとともに旅立った。1811年7月に英国に帰国して、旅行中の見聞を『貴公子ハロルドの巡礼』としてまとめさらに文学的に成功する。(笠原, 2009)

詩人は、1808年から1814年まで6年間ニューステッド・アビーに居住した。バイロンは私生活（異母姉オーガスタとの関係）のモラルを叱責され最終的に英国の社交界を追放された。彼は1816年に大陸へと出発した。彼はスイス、イタリアと詩人として友人たちのネットワークをたより大陸を放浪した。1824年にギリシャ独立戦争に義勇軍として参加していたバイロンはギリシャ本土のメッサロンギにて病気のため命を落とす。

邸宅の南の庭園にバイロンのオークがある。これは、詩人バイロンが爵位を継いだ記念に10歳の時はじめてニューステッド・アビーを訪れた1798年に植樹したと伝えられる。その10年後あまり良い状態に育っていないオークの木にむけてバイロンは *To an Oak at Newstead* を詠んだ。木は復活し、バイロンの死後もバイロンの事跡を訪れるヴィクトリア時代のポライト・ツーリストたちに大人気であった。しかし、1915年に木の状態が悪くなり救おうと試みたが失敗し、ついに切り倒された。現在は切り株をみることができる。1988年に詩人バイロンの生誕200周年を記念して詩人の子孫である Earl of Lytton が小さなオークの木をバイロンのオークの切り株の隣に植樹した。

バイロンの時代の庭園管理を考えると、池などの事例にみるように、修道院時代の遺物を改造し整備して再生している。バイロンの時代は修道院の廃墟という性格を生かしたピクチャレスクな景観管理を実践した。さらに最後の所有者6代詩人バイロンの事跡がニューステッド・アビーに強いキャラクターを新たに加えた。

2) ワイルドマン家の時代 (1818－1860)

陸軍大佐のトマス・ワイルドマン Colonel Thomas Wildman (1787－1859) は、6代詩人のジョージ・ゴードン・バイロン卿のハロー校時代の友人であった。彼はワーテルローの戦いで活躍し、軍人としてのキャリアで成功をおさめた。ワイルドマンの一族は西インド諸島にプランテーション the Beckford plantations in Jamaica を所有していて、そこから莫大な富を得た。ワイルドマンは、バイロンから荒れ果てた状態のニューステッド・アビーを£94,500で購入し

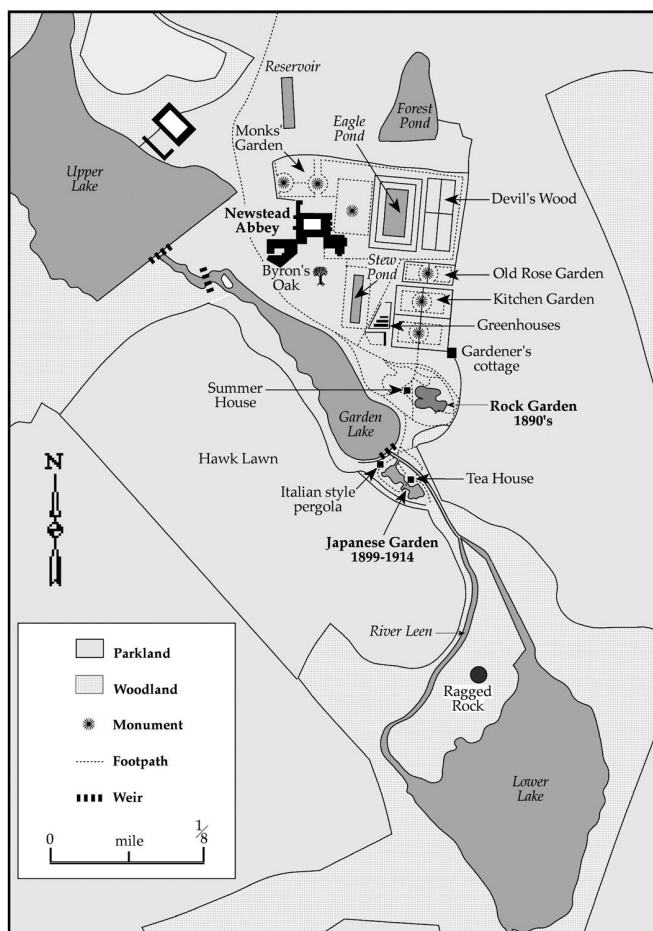


図2 ニューステッド・アビー庭園の19世紀後半の空間的配置図

(出典：(Tachibana et al., 2004) より一部改変)

た。続いて、彼は購入したニューステッド・アビーの邸内と庭園を改良するために、別に£100,000を費やした。ワイルドマンは新婚の妻 Lousia とともにニューステッド・アビーに住んだ。(Coope, 1991 ; 1997)

建築史学者 Girouard によると、軍人トマス・ワイルドマンは中世の騎士道精神をロマンチックに理想としていた。彼は、ニューステッド・アビーにおいて、彼の中世騎士道精神を視覚化しようとした。彼は建築家 John Shaw にデザインを依頼しニューステッド・アビーの景観管理を中世復古の趣味であるゴシックリヴァイバル様式で実践した。ニューステッド・アビーの邸内の中世騎士道世界を思わせるような装飾、なかでも美しいステンドグラスなどの中世趣味の強いキャラクターはこのときに付け加わった。(Girouard, 1981)

ワイルドマンは、バイロン家の時代にせき止められたリーン川から、現在見ることができる装飾的な庭園湖 Garden Lake を1820年に造成した。これによって、庭園と地所の景観は一変した。彼は地所を風景式庭園に整えた。つづいて、1850年前にワイルドマンは、邸宅の南東の2.5エーカーあまりのエリアに壁に囲まれ、装飾的な泉のあるキッチンガーデンをつくった。さらにワイルドマンの妻 Lousia は邸宅の東に新たに刺繍花壇 embroidery garden をつくった。ワイルドマンの庭園における大きな功績は、庭園湖 Garden Lake の造成とキッチンガーデンの造園であった。ワイルドマンは、ニューステッド・アビーに中世騎士道的な雰囲気と世界観を新たに付け加えた。庭園においても、邸宅の東のキッチンガーデンと Lousia の刺繍花壇は、中世復古のゴシックリヴァイバル趣味である。ワイルドマンの財力は、装飾的湖の Garden Lake の造成を可能にした。(Coope, 1997)

3) ウェブ家の時代 (1861-1931)

最も活発に庭園の改良が行われたのは、ウェブ家の時代である。ウィリアム・フレドリック・ウェブ William Frederick Webb (1829-1899) は、炭鉱で得た富でニューステッド・アビーを購入して成功の証とした。しかし彼自身はアフリカ探検で不在が多く、庭園にはそれほど熱心に関わらなかった。ウィリアム・フレドリック・ウェブは、アフリカでライオン狩りなどの狩猟に夢中であった。彼は著名なアフリカ探検家デイヴィッド・リヴィングストン David Livingston にアフリカで助けられ、それ以来彼らは親しくなり、リヴィングストンはしばしばニューステッド・アビーを訪れた。ウィリアム・フレドリック・ウェブはアフリカからライオンの毛皮やサイなどの狩りの獲物の頭の剥製をニューステッド・アビーに持ち帰った。ウェブの時代の The Great Hall の写真を見ると、ライオンの毛皮の敷物が写真に写っているだけでも4枚あり、壁面には狩りで得たアフリカに生息するサイなど立派な角のある動物の頭が誇らしげに5体飾られている。

ウィリアム・フレドリック・ウェブには、子どもが7人いた。そのなかでも妻と二人の娘ジェラルディン Geraldine (1859-1910) とエセル Ethel (1862-1915) は庭園の改良に熱心であっ

た。ジェラルディンはのちに Lady Chermside となる。ニューステッド・アビー地所は、父親のウィリアム・フレドリックが1899年にルクソールで亡くなった後、Lady Chermside の所有を経て、Ethel が、1910年に引き継ぐ。

ウェブ家の時代にシダ園 fernery、Benjamin Disraeli のロマンス小説 Venetia から着想を得たロックガーデンの様式によるベネチア庭園 Venetia's garden、スペイン庭園 Spanish garden、日本庭園 Japanese garden が新たに造園された。現在も見ることのできる庭園内のツツジとシャクナゲのコレクションはかれらが熱心に集めて植樹した。ワイルドマンが造園した中世風のキッチンガーデンにかれらは改良を加えた。ヴィクトリア時代の最新技術である暖房施設のついた温室をキッチンガーデンの西側に建てた。かれらはその中でぶどう、ピーチ、メロン、キュウリなどの野菜や果物を育て、シダやペゴニアなど邸宅を飾る花を栽培した。1860年代にガーデナーズコテージをキッチンガーデンの南西の隅に建てた。このようにウェブ家の庭園の改良は、実用に基づき生活に密着した庭園だと考えられる。

邸宅の北には Monks Garden とよばれている自然風なエリアがある。春には、灌木の林の下にスノードロップ、クロッカス、水仙が美しく咲く。ヴィクトリア時代に流行したウィリアム・ロビンソンが提唱したワイルドガーデンの様式である。(橘, 2009) かつて修道院であったことを想起してこの庭園に修道士の庭 Monks' Garden と名付けたのは、ウェブ家の人々である。この庭で修道士 monks が瞑想していたと想像力がかきたてられるような「自然なままの」ウィルダネス wildness 様式の囲まれた庭園である。

1899年から1914年にかけてエセル Ethel Webb が中心となって日本庭園がニューステッド・アビーにつくられた。日本庭園は、Garden Lake の南にある一段低くなった沼地にデザインされた。日本庭園造園のきっかけは一家の日本旅行だと伝えられる。ウェブ家の日本旅行を伝える詳細な資料はない。しかしながら邸内には、Japanese Room (かつての The Henry VII Room を改造した) とよばれる、日本から持ち帰ったと伝えられる鶴のふすま絵を壁にはめ込んだエキゾチックな部屋がある。(図3参照)

ウェブ家縁者の子孫の Pamela Gatty からエセルの日本庭園についての手稿が1996年7月11日にニューステッド・アビー博物館に寄贈された。(図4参



図3 ニューステッド・アビーの Japanese Room

(出典：1999年筆者撮影)

照) この手稿によるとエセルは日本に滞在していたお雇い外国人建築家のジョサイア・コンドル Josiah Conder の執筆した日本庭園について当時最も信頼のおける英文の著書 *Landscape Gardening in Japan* (1893) をパターンブックのように利用していた。(Tachibana, 2000; Tachibana et al., 2004) J. B. Firth による *Country Life* の1917年11月24日の記事 ‘Newstead Abbey II, Nottingham. The residence of Lady Markham.’ によるとこの日本庭園を造園するために日本人園芸家を雇った ‘laid out by a skilled Japanese horticulturist brought over for the purpose’ (Firth, 1917: 497) と記されているが、詳細については資料が残っていない。

ニューステッド・アビーを訪れた日本大使が、日本庭園を見てホームシックになったというコメントが *Country Life* の同記事に記されている。‘…it drew from the Japanese Ambassador the magnificent compliment that it was the only thing he had seen since he left Japan which made him feel homesick.’ (Firth, 1917: 497)

ウェブ家は、ニューステッド・アビーの中で2種類のエキゾチックな景観を創造した。ひとつは、父親のウィリアム・フレドリック・ウェブのアフリカ趣味である。図5のアフリカでライオン狩りをするウィリアム・フレドリック・ウェブの肖像画は、邸宅の南端にあるホールの大階段 *grand staircase* の壁面に現在飾られている。これを描いた画家 Alfred Corbould は、1831–1875年頃に活躍し、犬などの動物や狩猟の場面を描くのが得意であった。この画家は、ウェブ一家の個人的な友人でもあった。この絵の中で、ウィリアム・フレドリック・ウェブは、赤いシャツを着て馬のそばに銃を携えて立っている。横に座っているのは、彼の義理の兄弟の Captain W. Codrington of Wroughton である。若いアフリカ人の剥製士の少年が、ナイフを持っ

てしとめたばかりの死んだライオンの皮を剥こうとしている。それを3匹の犬が見ている。この場面は、ヴィクトリア時代の英国人の抱いていたロマンチックなアフリカの野生についての表象の一例である。娘のエセルは子ども時代から、このような父親のアフリカ趣味に囲まれて育った。

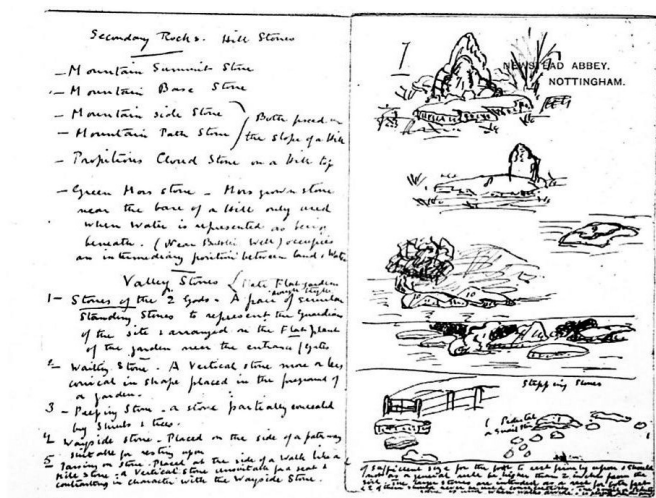


図4 Ethel Webb による日本庭園についての手稿
(出典: City of Nottingham Museums, Newstead Abbey.)

で実践した。ガーデニングである。とくにエセルは、1899年から日本庭園を熱心につくった。エセルは、日本庭園のなかに、父親の行ったアフリカのライオン狩りとは異なったかたちのエキゾチシズムと穏やかな自然をつくることを polite な実践とした。エセルが日本庭園を造園したところの20世紀のはじめの英国では、日本趣味（ジャポニズム）がやはり、多くの日本庭園がカントリーハウスの庭園につくられた。（Tachibana, 2000; Tachibana et al., 2004; 橘, 2006, 2008, 2009）



図5 アフリカでライオン狩りをする William Frederick Webb の肖像画。画家 Alfred Corbould による。(oil on canvas, 大きさ267×334cm, 1857, NA550)

(出典: City of Nottingham Museums, Newstead Abbey.)

ウェブ家の試みたニューステッド・アビーの庭園における polite な実践は次の3つにまとめられる。まず日本庭園において当時の英国で流行した庭園の最新スタイルで沼地という条件不利な土地の改良を行った。2点目は、キッチンガーデンの改良と温室の導入で生産的で実用的な庭園づくりを行った。3点目は Monk's garden をヴィクトリア時代の造園家ウィリアム・ロビンソンの提唱するワイルドガーデンのスタイルでつくることで修道士が荒野で瞑想するという庭園イメージの再生を現代的な様式で行った。

Ⅲ. ポライト・ツーリストの視点からみたニューステッド・アビー庭園

ニューステッド・アビーは英国で最も魅力のあるカントリーハウスのひとつである。多くのポライト・ツーリストはニューステッド・アビーに惹きつけられた。6代バイロン卿は、ロマン派の詩人として現在でもグローバルな人気を誇っている。(Bone, 2004) バイロンが、ギリシャ本土のメッサロンギにて1824年に亡くなった後、ニューステッド・アビーには文学巡礼者がポライト・ツーリストとして多く訪れた。

Adrian Tinniswood の著した *The Polite Tourist* のなかでも、ニューステッド・アビーは、ヴィクトリア時代のポライト・ツーリストたちにとくに人気のあったカントリーハウスだと論じられている。Tinniswood によるとニューステッド・アビーの人気の理由は、バイロン巡礼に代表される文学的な雰囲気とゴシックの中世の廃墟の醸し出す独特のスタイルの魅力である。(Tinniswood, 1998)

この章では、ポライト・ツーリストの視点から見たニューステッド・アビーの姿をガイドブッ

クの視点からみる。

1) 初期ガイドブックからみたニューステッド・アビー

バイロン家の時代のニューステッド・アビーでは、ポライト・ツーリストを想定してガイドブックが書かれることはなかった。

ヴィクトリア時代のニューステッド・アビーのガイドブックとして、代表的なものは次の2冊である：

- i) Bailey, Thomas (1855) *Handbook to Newstead Abbey*. London.
- ii) Allen, Richard (1874) *A Souvenir of Newstead Abbey, Nottinghamshire*. Longman & Co. London

ワイルドマン家の所有時代（1818－1860）の最初期のガイドブックは、Bailey による。ウェブ家（1861－1931）の時代のガイドブックは Allen による。このガイドブックのタイトルからこの冊子はポライト・ツーリストのニューステッド・アビー見学の土産や記念品 a souvenir とされたと考えられる。この2冊のガイドブックは、ともにニューステッド・アビーにおける詩人6代バイロン卿の事跡を紹介している。たとえば Bailey のガイドブックをみると：「詩人のベッドルーム」は an object of interest to all visitors として紹介している。つづいて修道士の幽霊がでるという the Haunted Chamber が紹介されている：‘a dismal room, where, as it is commonly said by the guide, the spirit of a restless monk.’ (Bailey, 1855) バイロンが庭園から掘り出された修道士の骸骨で酒杯をつくり宴で飲んだというエピソードが想起される。このような修道士の幽霊がでるという逸話は、ニューステッド・アビーのゴシックの中世スタイル、修道院の廃墟の醸し出すピクチャレスクな舞台背景があって成立する。現在のニューステッド・アビーでも秋になるとゴーストツアーが開催される。幽霊の話は、ニューステッド・アビーの魅力のひとつとなっている。

20世紀になった後ニューステッド・アビーの庭園が丁寧に紹介されているガイドブックは次の1冊である：

- iii) Lloyd, J. (1916) *A Guide to Newstead Abbey and Gardens*. Nottingham.

この1916年刊行のガイドブックには、次のような副題がある：Containing a description of the Byron and Livingston relics, incidents in the early life of the poet, a history of the Abbey, and chapters on Annesley Hall, and Byron’s burial-place. やはりバイロン巡礼に役立つ情報があることをアピールしている。加えて、アフリカ探検家のリヴィングストンのニューステッド・ア

ビーでの逸話も記載されている。リヴィングストンはウィリアム・フレドリック・ウェブの友人でニューステッド・アビーに1864-5年に滞在している。彼は2冊目の旅行記 *The Zambesi and its Tributaries* を the Sussex Tower にて執筆した。ウィリアム・フレドリック・ウェブの娘の一人の Augusta Fraser はリヴィングストンとの思い出を *Livingstone and Newstead* にまとめ1913年に John Murray 社から刊行した。

(Fraser, 1913)

庭園においてポライト・ツーリストたちに人気のあったバイロンにちなむものは、1808-1809年の冬に邸宅の東側の庭園にたてられたニューファンドランド犬 Boatswain の大きな記念碑である。もともとバイロンはこれを愛犬と彼自身のための墓としてつくった。しかしながらバイロンは、Hucknall の教会に葬られている。現在は、Boatswain のみがここで眠っている。バイロンは、追悼として次の言葉を刻んでいる。‘possessed Beauty without Vanity, Strength without Insolence, Courage without Ferocity, and all the Virtues of Man without his Vices.’

次は Newstead Abbey がノッティンガム市の所有になった1931年以降、初めて公刊されたガイドブックである。

iv) Corporation of Nottingham (c.1938) *Newstead Abbey (Notts): the property of the Corporation of Nottingham*. Burrow & Co. Cheltenham.

このガイドブックでは、ノッティンガム市 Corporation of Nottingham が新たにニューステッド・アビーを資産 the property として得たと誇らしく副題でうたっている。このガイドブックは、Charles Ian Fraser, ESQ. と Sir Julien Cahn に捧げられている。Charles Ian Fraser は、William Frederick Webb の孫にあたる。彼は、バイロンの家具とゆかりの品々をノッティンガム市に寄贈した。Sir Julien Cahn はニューステッド・アビーをノッティンガム市に寄贈した。この二人の功績のおかげでノッティンガム市はニューステッド・アビーを入手できた。

このガイドブックにはもうひとつ副題がある：A concise handbook to the abbey ruins the mansion with its Byron and other relics and the gardens. このガイドブックでは歴史や過去の



図6 詩人6代バイロンの愛犬 Boatswain の記念碑

(出典：2008年3月筆者撮影)

記録を通して今日の姿について理解が深まるような記述に重点をおくと述べられている。
(Corporation of Nottingham, c.1938: 5) ニューステッド・アビーは、公共の資産となり、博物館としてひろく一般に公開された。

2) ニューステッド・アビーへの訪問者：ポライト・ツーリストたち

バイロン卿の次の所有者となったワイルドマンは、ニューステッド・アビーは、詩人バイロンの邸宅であったという歴史を大切にしていた。彼は人気のあった詩人バイロンの事跡を訪ねるポライト・ツーリストを地所に受け入れた。ワイルドマンは詩人バイロンの娘 Ada や作曲家のフランツ・リストをもてなしたことが記録されている。

アメリカ人作家ワシントン・アーウィング Washington Irving は1832年にワイルドマンを訪問して、ワイルドマンによる邸宅と庭園の改良の成功をほめたたえた：

Newstead has risen from its ruins in all its old monastic and baronial splendour and its additions have been made to it in perfect conformity of style. The groves and forests have been replanted, the lakes and fishponds cleaned out and the gardens rescued out from 'hemlock and thistle' and restored to their pristine and dignified formality. (Irving, 1850)

ウィリアム・フレドリック・ウェブは、ニューステッド・アビーの近くを通過する鉄道 Midland Railway に私的な駅 a private station を設置した。ウェブ家の人びととニューステッド・アビーを訪れる人びとの便利のためである。やがて駅には、Newstead Station Hotel ができた。ホテルの経営者は、限られた数であるがニューステッド・アビーの入場券を扱っていた。訪問者は、駅から1.25マイルの栗と菩提樹の並木の道のりを歩きニューステッド・アビーに到着する。そこでウェブ家のハウスキーパーの Mrs. Mary Cooper に挨拶して、邸内と庭園を案内してもらおう。これが、ウェブ家の時代のポライト・ツーリストのニューステッド・アビー訪問のスタイルであった。(Wood, 1978; City of Nottingham, n.d.; Coope, 2001)

ウェブ家の時代には、エドワード7世やジョージ王など高貴な客人が何度かニューステッド・アビーを訪問したことが1916年の Lloyd によるガイドブックに記されている：

During Miss Webb's ownership, the late King Edward several times visited Newstead Abbey, motoring over from Rufford Abbey, where he annually spent the Doncaster week with Lord and Lady Savile. King George and Queen Mary made a short stay there during their tour of North Notts. in June, 1914. (Lloyd, 1916 : 44-45)

エセル・ウェブが1915年に亡くなったとき、地方新聞の *Mansfield Advertiser* では、彼女の

追悼記事が掲載された。その中で「彼女はイングランドにおいて一番のアマチュア造園家のひとり」‘one of the best amateur gardeners in England’ と評された。さらに記事はニューステッド・アビーに彼女が築いた園芸植物のコレクションは世界第一級品だと評価している。続いて記事は、彼女は、庭園を何度も一般に公開したと記す。しかしながら日常生活の場に見学者であるポライト・ツーリストを受け入れるのも限界があるようで、1916年の Lloyd のガイドブックでは次のようにポライト・ツーリストに注意をうながす：

For many years Miss Webb generously threw open the Abbey to public view, but at last the stream of visitors became so large and exacting that she had in self-defence to curtail these privileges, for it must be remembered that Newstead is not a mere show-place, like Haddon Hall, but a domestic residence. (Lloyd, 1916 : 44)

ウェブ家の頃のニューステッド・アビーは、生活の場所でもあった。単なる show-place ではなかった。Tinniswood も指摘するように、ニューステッド・アビーは個人の生活の場所でもあったので、ポライト・ツーリストを無制限に受け入れることはできなかった。ポライト・ツーリストを受け入れるにあたりウェブ家は、一度に6人まで、事前に手紙で申込をするという制限をつけた。ポライト・ツーリストはグループにまとめられ、ハウスキーパーによるガイドによって邸内と庭園を案内された。(Tinniswood, 1998 : 152) ニューステッド・アビーはポライト・ツーリストに人気のあるカントリーハウスであった。

謝辞

筆者は資料調査と現地調査にかんしてノッティンガム市ニューステッド・アビー博物館 (City of Nottingham Museums, Newstead Abbey) の Haidee Jackson 氏に大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 岩切正介 (2008) 『ヨーロッパの庭園』 中公新書
岡田温司 (2010) 『グランドツアー：18世紀イタリアへの旅』 岩波新書
オースティン, ジェイン (大島一彦訳, 2005) 『マンスフィールド・パーク』 中公文庫
笠原順路編 (2009) 『対訳バイロン詩集：イギリス詩人選 (8)』 岩波文庫
川北稔編 (1998) 『イギリス史』 山川出版者
川北稔 (1996) 『砂糖の世界史』 岩波ジュニア新書
川崎寿彦 (1991) 『楽園のイングランド：パラダイスのパラダイム』 河出書房新社
サイード, E. W. (大橋洋一訳, 1998) 「ジェイン・オースティンと帝国」, サイード, E. W. (大橋洋一訳, 1998) 『文化と帝国主義 1』 みすず書房
佐久間康夫・中野葉子・太田雅孝編著 (2002) 『概説イギリス文化史』 ミネルヴァ書房
鈴木博之 (1996) 『ロンドン：地主と都市デザイン』 ちくま新書

- 本城靖久 (1994) 『グランド・ツアー：英国貴族の放蕩修学旅行』 中公文庫
- 高山宏 (1995) 『庭の綺想学：近代西欧とビクチャレスク美学』 ありな書房
- 高山宏 (2007) 『近代文化史入門 超英文学講義』 講談社学術文庫
- 橋セツ (2006) 「庭園をめぐるライフヒストリー／ライフジオグラフィー：英国人植物学者レジナルド・ファラーの日本旅行とロックガーデンに魅せられた人生」 (p.89-104) 『神戸山手大学紀要』 8号
- 橋セツ (2008) 「世界漫遊旅行者と庭園：エラ・クリスティアーの日本旅行とコウデン城の日本庭園造園」 (p.31-49) 『神戸山手大学紀要』 10号
- 橋セツ (2009) 「庭園のなかの野生と異文化：ウィリアム・ロビンソン『ワイルド・ガーデン』(1870)の思想と実践について」 (p.141-156) 『神戸山手大学紀要』 11号
- 田中亮三 (2008) 『新装版図説英国貴族の城館』 河出書房新社
- 田中亮三 (2009) 『図説英国貴族の暮らし』 河出書房新社
- ダニエルズ, S. (2001) 「ジョージ朝後期イギリスにおける森林の政治的イコノグラフィ」, コスグローブ, D., ダニエルズ, S. 編著 (千田稔, 内田忠賢監訳, 2001) 『風景の図像学』 地人書房
- ホーン, パメラ (子安雅博, 2005) 『ヴィクトリアン・サーヴァント：階下の世界』 英宝社
- 村岡健次・川北稔編著 (2003) 『改訂版イギリス近代史：宗教改革から現代まで』 ミネルヴァ書房
- ローゼン, アンドリュー (川北稔訳) (2005) 『現代イギリス社会史：1950-2000』 岩波書店
- Allen, Richard (1874) *A Souvenir of Newstead Abbey, Nottinghamshire*. Longman & Co. London
- Bailey, Thomas (1855) *Handbook to Newstead Abbey*. London.
- Beckett, John (2001) *Byron and Newstead: the Aristocrat and the Abbey*. University of Delaware Press.
- Bone, Drummond Eds. (2004) *The Cambridge Companion to Byron*. Cambridge University Press.
- City of Nottingham (n.d.) *Newstead Abbey: a tour of the garden*. City of Nottingham, Leisure and Community Services.
- Coope, Rosalys. (1987) 'Lord Byron's Newstead: The Abbey and its Furnishing during the Poet's ownweship, 1798-1817' *Transactions of the Thoroton Society* 91. 133-154.
- Coope, Rosalys. (1991) 'The Wildman Family and Colonel Thomas Wildman of Newstead Abbey, Nottinghamshire' *Transactions of the Thoroton Society* 95. 50-66.
- Coope, Rosalys. (1997) 'Colonel Thomas Wildman and the transformation of Newstead Abbey, Nottinghamshire' *Transactions of the Thoroton Society* 101. 157-173.
- Coope, Rosalys. (2001) 'The Webb Family of Newstead Abbey' *Transactions of the Thoroton Society* 105. 137-154.
- Corporation of Nottingham (Eds) (c.1931) *Newstead Abbey (Notts): the property of the Corporation of Nottingham*. Burrow & Co. Cheltenham.
- Corporation of Nottingham (Eds) (1945) *The Story of the Abbey*. Nottingham.
- Cowell, Ben (2010) 'A brief history of the day out.' *Conservation: a bulletin of the Historic Environment*. 64. (Summer 2010) English Heritage.
- Culpin, Christopher (1995) *Learning from Country House*. The National Trust.
- Daniels, Stephen. (1999) *Humphry Repton: Landscape Gardening and the Geography of Georgian England*. Yale University Press
- Daniels, Stephen (2002) 'Gothic Gallantry: Humphry Repton, Lord Byron, and the sexual politics of landscape gardening', Conan, M. Eds. *Bourgeois and Aristocratic Cultural Encounters in Garden Art, 1550-1850*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection. Washington, D.C. (311-336)
- Firth, J. B. (1917) 'Newstead Abbey II, Nottingham. The residence of Lady Markham.' *Country Life*. 24th

Nov. 1917.

- Fraser, A.Z. (1913) *Livingstone and Newstead*. John Murray. London.
- Girouard, Mark. (1978) *Life in the English Country House*. Yale University Press.
- Girouard, Mark. (1979) *The Victorian Country House*. Yale University Press.
- Girouard, Mark. (1981) *The Return to Camelot: chivalry and the English gentleman*. Yale University Press.
- Irving, Washington (1850) *Abbotsford and Newstead Abbey*. London.
- Langford, P. (1992) *A Polite and Commercial People*. Oxford.
- Lloyd, J. (1916) *A Guide to Newstead Abbey and Gardens*. Nottingham.
- Seymour, Susanne, Daniels, Stephen and Watkins, Charles. (1998) 'Estate and empire: Sir George Cornwall's management of Moccas, Herefordshire and La Taste, Grenada, 1771-1819' *Journal of Historical Geography*, 24-3
- Tachibana, Setsu (2000) *Travel, plants and cross-cultural landscapes: British representation of Japan, 1860-1914*. Unpublished PhD thesis submitted to the University of Nottingham.
- Tachibana, Setsu, Daniels, Stephen and Watkins, Charles (2004) 'Japanese gardens in Edwardian Britain: landscape and transculturation' *Journal of Historical Geography* 30-2 (364-394)
- Tinniswood, Adrian (1998) *The Polite Tourist: A History of Country House Visiting*. The National Trust. London.
- Wheeler, P.T. (1989) 'The grounds of Newstead Abbey.' *The East Midland Geographer*. 12-1, 2 Department of Geography, University of Nottingham.
- Williamson, Tom (1995) *Polite Landscapes: Gardens & Society in eighteenth-century England*. Sutton Publishing.
- Wilton, Andrew and Bignamini, Ilaria eds. (1996) *Grand Tour: the lure of Italy in the eighteenth century*. Tate Gallery Publishing.
- Wood, Pamela J. (1978) *A Guide to Newstead Abbey*. Nottingham City Museum.